



ICT 海外ボランティア会会報

No. 50

2014年6月13日(金)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : sv@info.nttob.org

目次

- ◆ 特別寄稿
悲観的な見方をすれば、行動はすべて消極的になる
ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

- ◆ 技術協力の思い出 (5)
ボリビア国内電話網計画策定に参加して
元電電公社国際局調査役 松本道夫氏

- ◆ 会報を振り返って
ICT 海外ボランティア会会報第50号発行にあたって
ICT 海外ボランティア会事務局長 加藤 隆氏

- ◆ 海外グラフィティ
ドイツの香り
日本ベンダーネット社長 田上 智氏

- ◆ 現地便り (レソト便り 2)
やっぱ、優しい国です
ICT 海外ボランティア幹事 SV 山下 満男氏

- ◆ 現地便り (コロンビア便り 5)
サッカーワールドカップ日本の評判
ICT 海外ボランティア幹事 SV 野村 徹氏

- ◆ 第8回 海外情報談話会開催模様 事務局

- ◆ 第9回海外情報懇談会開催のお知らせ 事務局

特別寄稿

悲観的な見方をすれば、行動すべて消極的になる

I C T海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

いつもの好、不況のサイクルと違って、不況が相当長引くことがある。それをイヤがったとしても、そういう時には現実の姿は、すでにそうなっているのだから仕方ない。どうしようもないことに頭を使うより、どうやって切り抜けるかに頭を使うようにしなくては、ただ悲観的になるだけである。

人間というのは意思の動物だから、悲観的な見方をすれば行動がすべて消極的になってしまう。逆に乗り切ろうという心構えで動いていけば、やることすべて能率よく動いていて、必ず切り抜ける。

不況の時には、自分の会社だけが不況に見舞われているのではなく、社会全体が不況に見舞われているのだし、時がくれば必ず道は開ける。次の好況期に備えて、従来の組織、習慣を新しい環境に合うように一人ひとりが努力していかなくてはならない。一人ひとりが従来の慣習やセクショナリズムの殻を破る気になることが大切である。

【石井 孝氏のひと言】

「世の中の変化に追従、或いは先取りして、企業が生き残るためには、社員個々人自らが、自ら考え、自らの手で、今やっている事の悪い点を見つけ改善し続けて行かねばならない。これは特段難しい事ではなく、原理・原則に則って、当たり前前の事を当たり前前に実行することである」と、繰り返し教えられた。

そして、トップ自らがその姿勢を貫き、部下たちの尻を押し、自主、自立、自律の原点が何であるかを悟らせてくれたのである。

技術協力の思い出（5）

ボリビア国内電話網計画策定に協力して

元電電公社国際局調査役 松本道夫

1. はじめに

エルアルト国際空港（標高 4,000m）には予定より半日遅れて午前 2 時頃到着した。1979 年 3 月 22 日のことである。出迎え車で首都ラパス（標高 3,800m）へ向かった。車道の両側は山々がそそり立ち所々明るく見えたが、それがインディオ住宅の灯りだとは後で知った。



ホテルで数時間休んでから街へ出てみた。時差ぼけのためか気圧のせい、足どりは何となく頼りない。気温は高くないが直射日光は強烈で街は明るい。市内の各所からはデモ行進の列が続々とくり出されて中心街をねり歩き、また見物の群集も歩道にあふれ非常に賑やかであった。ボリビアはその1世紀近く前、チリとの戦いに敗れて太平洋沿岸の領土を失い、内陸に閉じ込められてしまった。当日は「海」の回復を

願う「海の記念日」だったのだ。ともあれ、この日の印象はラ・パス（平和を意味するスペイン語）そのものであった。

奇妙なことに、ボリビアにも海軍が存在する。ただし、その艦艇は海ではなく、ボリビアとペルーとの間に拡がり琵琶湖の12倍以上の面積を誇るチチカカ湖を縄張りとしている。

ボリビアの国土面積は日本の約3倍であるが、当時の人口は570万人に過ぎなかった。人種構成はインディオ52%、インディオ・白人の混血27%、白人14%、その他7%だった。日系移民は1万人余りだったが、その活動が高く評価されており、我々も安心して暮せた。

第二次大戦末期、南米諸国は米国の圧力を受けて日本に宣戦を布告した。特にボリビアは、1942年6月から3年間以上も日本と敵対関係にあった。そのボリビアが、戦いに敗れマッカーサーから「七等国まで落ちぶれた」と卑下された餓死寸前の日本に対し移民受入れの手を差し伸べたのだった。我国にとって忘れ難い恩義のある国と言うべきであろう。

ボリビアは、鉱業分野では錫、亜鉛、鉛、銀、アンチモニ、タングステン、天然ガス等を産出するが、天然ガスは有望で近隣諸国へ輸出している。最近、リチウムが世界的注目を浴びているが、同国ウユニ塩原には全世界リチウム埋蔵量の約半分が眠ると推定されている。農業分野では綿花、砂糖きび、米その他が取れる。牧畜もかなり盛んに行われている。

ボリビアは、中南米諸国中でも、最も政情が不安定な国の1つであり、1825年に独立して以来、小生の同国在任の時期までに、実に190回近いクーデターを経験していた。

ここで、小生の在任期間中における政権推移を振り返って見よう。1979年6月に総選挙が行われたが、過半数獲得の大統領候補が現れず、このため同年8月にゲバラ上院議長が臨時大統領に選ばれて民政が発足した。しかし、早くも3ヵ月後の11月にブッシュ大佐が敢行したクーデターに打倒された。そのブッシュ軍政もわずか15日間の短命に終わり、今度は下院議長のリディアが臨時大統領に就任して民政が復活した。

ボリビア初の女性大統領誕生である。翌1980年7月に総選挙が行われたが、三軍の支持を得たガルシア將軍は開票結果を待たずして、リディア大統領をはじめ、閣僚や政党・労組の要人を追放し軍政権を樹立した。しかし、同政権も、軍部内の勢力争いにより1981年8月に至り辞任に追い込まれた。

2. 技術協力の概要

小生は1979年3月から2年3ヵ月間、JICAから2代目の搬送専門家としてボリビアへ派遣された。着任より約2年間はDGT（運輸通信省・電気通信総局）で、残る期間はCEPITEL（電気通信総合計画特別委員会）で勤務した。小生着任の1年後には交換専門家1名も派遣されて来たが、我々の協力目的は「国内電話網計画」策定の指導であった。

当時、同国の市内電話サービスは電話会社16社が31都市で提供していたが、全国加入電話は約154,000回線で100人当り普及率は2.7と南米諸国中で最低の水準であった。

一方、市外電話サービスは、ENTEL（電気通信公社）が主要7州都間でマイクロ無線方式により自動即時サービスを提供するほか、主要17都市間で短波による待時サービスを提供していた。しかし、残余の僻地については、DGTの下部組織が全国800市町村の通話所間で、短波又は裸線によりわずかにサービスを維持しているに過ぎなかった。

ボリビアでは主要産物である鉱物資源の産出量低下が続き、これに代えて農業開発を促進する必要に迫られており、この観点からも電気通信サービスの全国的拡充が急務であった。

着任当初はDGTが単独で「国内電話網計画」の策定を担当していたが、従事する技師はわずか2・3名で、しかも本来の通信行政の副業として行なっているに過ぎなかった。しかし、その約1年後には、関係機関が協力して計画策定を進めようとする機運が高まり、ENTELやINTEL（電気通信研究訓練所）の技師連中も計画会議に参加するようになって作業体制は徐々に改善されて行った。

特に、1981年2月末に通信次官直属の機関としてCEPITELが組織されるや、従来の体制は面目を一新し、計画作業が急速に進捗するようになった。その結果、早くも3ヵ月後の5月には、同計画が5ヵ年計画（1983－1987）として完成された。

国内電話網計画は、通例どおり、「基本計画」と「設備計画」とから構成された。

基本計画では市外帯域制、市外交換方式、回線網構成、呼損率、市外番号、伝送品質その他を規定したが、市外帯域制としては総括局、集中局および端局の3局階位制を採った。

設備計画の主目的は、全国主要都市の市内電話自動交換化と、これら都市間の市外電話自動即時化である。主要工程は市内交換局32局、市外交換局5局、マイクロ無線方式6ルート、UHF方式36ルート、国内衛星通信地球局5局の新設である。これは加入電話14,900回線、市外電話1,460回線の新增設に相当する。所要工事費は8,600万米ドルと積算された。なお電話会社の増設計画を含めると、100人当り電話普及率は2.7から3.4へと向上する。

計画完成に伴い、ボリビア政府は日本政府に対しフィージビリティ調査実施を要請した。これを受け、1981年6月には事前調査団4名が派遣され、次いで本格調査団13名が10月から約2ヵ月間派遣された。その結果、ボリビア政府から円借款供与の正式要請が提出されれば、70数億円を供与する日本側の体制が整った。

しかし、翌1982年にボリビアは物価が数千倍にも高騰する空前のインフレに襲われた。軍部はそれまで、クーデターを繰り返しつつ政権を掌握して来たが、遂に断念せざるを得なくなった。これに代り、亡命先から復帰したUDP（人民民主連合）のシレス・スアソが同年10月、圧倒的支持を得て大統領に選出された。しかし、この左派政権が円借款の要請案件を

放棄したので、「国内電話網計画」の実施は見送られてしまった。

その後何年も経ってインフレ収束が進んだ段階で、ボリビア政府は複数国から少額ずつ借款を取付けて当該計画の一部を実施した。従って、円借款による日本技術の進出は果たせず実に残念ではあったが、技術協力は一定の成果を挙げたと言えるかも知れない。

なお、計画策定の作業において我々JICA 専門家の筆頭カウンターパートを務めたペラルタ技師は当時、ENTEL の若手課長であったが、後に同会社の総裁にまで昇進した。

3. むすび

ボリビアは歴史的に見て、混乱の中に進歩を求めることが宿命のような国であるが、無尽蔵な天然資源に恵まれていながら、「黄金の玉座に坐る貧者」との呼び方が今なお相応しいほど、南米諸国の中で最も開発が遅れた貧しい国なのだ。

我々は長年の友好国ボリビアが豊かに発展することを願うものであるが、地下資源であれ農業資源であれ、かくも広大で険しい国土において、これを開発するには、電気通信サービスの拡充が不可欠である。従って、今後とも電気通信分野での協力を重視する必要がある。

また、ボリビアはハイテク産業に不可欠な希少金属の宝庫であるので、国益の見地からも、この国とより良き関係を築くことが大切だと思う。

会報を振り返って

ICT海外ボランティア会会報第50号発行に当たって

ICT海外ボランティア会事務局長 加藤 隆

当 ICT 海外ボランティア会会報は、当会活動の歩みの一環とし、インターネット配信により発行されてきて、今回が第 50 号で一つの区切りを迎えました。会報は当会会員や支援をいただいている方々との接点であり、会からの積極的な発信の窓で、同時に皆様からの声をいただく活動の重要な柱です。この間延 160 名の多くの方々にご寄稿をいただき、皆様から感想や激励の言葉もいただきました。この機会に関係各位に謝意を表しつつ会報の歩みを振り返ってみます。

当会は 2008 年 7 月 26 日「NTTOB 海外ボランティア会」として発足し、会報第 1 号は同年 8 月 1 日に発行されました。当初は内容も平易で、会の体制・活動紹介・シニア海外ボランティア (SV) 募集案内等でした。会報は凡そ 1 ヶ月半毎に配信されていますが、回を重ねるにつれ内容は幅広く、深く、様々な分野に及んで参りました。大きく次のように区分できるかと思えます。

- | | | |
|-----|---------------------------|--------------------------|
| 第Ⅰ期 | 1号(2008年8月)~10号(2009年4月) | 揺籃期 (体制、顧問就任挨拶等) |
| 第Ⅱ期 | 11号(2009年8月)~18号(2010年7月) | 萌芽期 (現地だより、リレー寄稿開始) |
| 第Ⅲ期 | 19号(2010年8月)~24号(2011年4月) | 拡張期 (会活動 (トコプロジェクト等) 紹介) |

第Ⅳ期 25号(2011年5月)~39号(2013年3月) 拡充期(グローバル展開、他機関との協調)
第Ⅴ期 40号(2013年5月)~50号(2014年6月)~ 分野拡大期(世界経済、技術協力の沿革)
(第Ⅰ・Ⅱ期:NTTOBボランティア会、第Ⅲ~Ⅴ期:ICT海外ボランティア会)

この中で一貫しているのは当会設立の趣旨から、皆様にSV応募を奨めるため、JICA SV 募集説明会や要請案件の紹介を行ないました。また特別顧問や顧問からは活動に対する期待等それぞれ「ご挨拶」をいただき、特に第6号(2008年11月)にはNTT三浦社長(当時)の「ご挨拶」をいただきました。

「現地だより」は第11号(2009年8月)から掲載され、各地の開発途上国で活躍しているSVや青年海外協力隊(JOCV)からの躍動溢れる寄稿を27編、またほぼ同時期に始まった会員によるボランティア活動の思い出等の「リレー寄稿」は11編掲載されました。

また第18号(2010年7月)から期に応じて「巻頭言」をいただいています。お寄せいただいた方々は、特別顧問宮村智氏を始め、伊藤隆文、飯塚久夫、石井 孝、北川泰弘、桑原守二、真藤 豊、鈴木正誠、副島俊雄、松本文郎、松岡和久、真崎秀介の各氏(アイウエオ順)等です。

石井 孝氏による示唆に富んだ「真藤語録」は第26号(2011年10月)から連続25回を重ね、多くの反響をいただいています。また田上 智氏による軽妙なエッセイ「海外グラフィティ」は第22号(2011年1月)から14編をいただきました。

また当会の活動の一つとして、当会が中心となって形成された「ICTを活用したトンガ王国防災通信システム」プロジェクトに関して、中心となって活躍した鈴木道弘、山下満男、内山鈴夫、田村正人の各氏から節目節目で紹介いただきました。当会は会費無しの会ですので、全てボランティアでご寄稿いただいています。

2013年6月に開始した「海外情報談話会」は第9回目を迎えますが、この開催案内と開催模様を連動して会報に掲載しています。その第4回は増田義雄氏による「新書“ベル研究所の興亡”の発刊によせて」の講話でしたが、その開催模様を読まれた葉原耕平氏からそれに関連する数千字に及ぶご寄稿をいただきました。また第6回は松本 隆氏による「NECの技術開発とSDN」でしたが、その後これに参加された青山友紀氏等によりFaceBookで感想の交換もありました。なおこの談話会も無料です。

かつてJICA 専門家等として途上国で技術協力に従事された方々による「技術協力の思い出」の連載を始めました。これらを幾分なりとも記録に留めたいとの思いから開始しました。これには「リレー寄稿」としていただいた中の幾編も該当しそうです。そのほか多くのユニークで示唆に富んだご寄稿を掲載させていただいています。

現在会報は、当会顧問・会員・支援者450名のほか、NTT 関係技術士会会員の皆様に配信させていただいて、この数も次第に増えています。

また会報は当会のホームページ(<http://www.ictov.jp/>)に収録され、「ご挨拶」「特別寄稿」のほか、シリーズとして「真藤語録」「海外グラフィティ」「現地だより」「技術協力の思い出」等が収録されています。

これには多くの皆様方の本活動に対するご理解・ご支援・ご激励の賜物と深く感謝いたし

ています。今後も細々ではありますが続けて参る所存です。このような柔軟な会報ですので、皆様の分野を越えたご寄稿をお願いいたしたく何卒よろしくお願い申し上げます。

なお本会報編集・発行に当たっては、大局的な方針について石井 孝顧問、及び編集・配信について村上勝臣報道部長に負うこと大なるものがあることを申し添えさせていただきます。

海外グラフィティ

ドイツの香り

日本ベンダーネット社長 田上 智

昨年末、サントリーホールで「ベートーベンの第九交響曲」を楽しんだ。生で聞いたのはこれが初めてで、特に第4楽章の「合唱」は迫力満点であり、二階席最前列という最高の席であったのも印象を強めた。今やベートーベンの第九は恒例の国民的行事で年末には日本各地で演奏されているが、「第九・歓喜の歌」が日本で歌われたのは、今から95年前、1918年（大正7年）6月1日のことであった。場所は徳島県鳴門市の坂東俘虜収容所である。



鳴門市長を新年の挨拶で訪れたが、市長の背の方向の壁に、オーケストラと誠に大勢の混声合唱団の大きな写真が見えた。「数年前の第九の写真ですよ。オーケストラは徳島交響楽団、合唱団は全国から集まってきた有志で、素人とはいえ皆経験者ばかりで実力はなかなかの物です。指揮者はその都度変わりますが、小沢征爾さんが来たこともありますよ」との説明である。鳴門は今や「うずじお」ではなく、この「毎年恒例・6月第一日曜日の第九」のようだ。市の文化会館で催されるが、特徴的なのは、その合唱団の人数の多さで、何と650名を超すという。せいぜい観客が1,500名弱だとすると、（合唱団650名＋楽団員）と観客数との比はこれもおそらく日本一の比率であろう。従ってその圧迫感たるや相当のものと思像ができる。

市長の話が続く「日本で一番早く第九が演奏されたというほかに、この坂東俘虜収容所は、所長が伝説に残るような人格者でまさに模範的な収容所だったそうです。松江という名の会津の人でした。それと、ドイツ人捕虜が様々な技術を日本人に教えて、例えば製パンについては、今も市内に「ドイツ軒」という名のパン屋がありますよ」。

1914年、第一次世界大戦で、日本軍はドイツの極東根拠地・中国の青島（チンタオ）を攻略した折、4,700名の戦争捕虜を抱えることになった。そのうち約1,000名が坂東俘虜収容所に収容された。俘虜の多くが民間人であったため、野菜の栽培、パンの製造など技術移転も行われた。テニスコートやサッカー場などスポー



ツ施設も建設され、住民との交流も盛んであったという。

このように、自主的で人道的な俘虜の管理姿勢を取ったのが、会津若松出身の収容所長「松江豊寿大佐」だった。「武士の情け」を重んずる性格があるいは、官軍に敗れた会津人ゆえだったかもしれない。

鳴門市長との面談の後、話に出た「ドイツ軒」に行ってみた。ちょうど、2人の外国人がいたので、「ドイツ人か？」と聞いてみたが、「オーストラリア人」だとのことで、俘虜収容所のことを説明しようとしたが、キーワードの「俘虜収容所」の英語が浮かんでこない。第一次世界大戦直後からここにある実に古い店だということとどまったが、面白いことにドイツパンの他にフランスパン、イギリスパンが置いてあった。店の女の子に「この店にまつわるパンフレットがないか？」聞いたが、「無い！」とのつれない返事。

俘虜の音楽活動のフィナーレを飾ったのが、「ベートーベンの第九」であったのだが、収容所長松江大佐、捕虜のうち最高位のドイツ軍青島総督（少将）、ドイツ兵や住民との交流を描いたのが古田 求氏の小説「バルトの楽園(がくえん)」で、映画化もされているが、この小説の最後はやはり、「第九」第4楽章の「歓喜の歌」で締めくくっている。

鳴門市長の薦めのとおり、今年6月の第一日曜日に文化会館での「力強い合唱」を聞きたいものだ。

現地便り レソト便り (2)

やっぱ心優しきレソトの人よ！

I C T海外ボランティア会幹事 S V山下 満男

レソトでの生活もアツという間に7ヵ月過ぎ、残り3ヵ月となりました。「光の速さで旅行をする旅人」と「地球に留まったままの旅人」では時間の流れが異なってくるとの理論がありますが、レソトにいる私はどうやら「地球に留まったままの旅人」のようで、時間が早く過ぎ去っていきます。

1. 心優しきレソトの人々

「レソトをどう思うか？」私がレソトの人々からよく聞かれる質問です。「レソトの人々は優しいよ！」「レソトはよい所で大好きだよ！」これが私の答えている回答です。実際、私が出会ったレソト人は心優しく明るく陽気な人々が多いようです。



職場で最も親しいタベルさんと旦那さん。
パーティに招待してくれたり、旦那さんの運
転で首都マセルから80Km程はなれたリゾート
地を案内してくれた。



ITセクションの同僚たちと出かけた標高
3,000mにある大学のタバティセカキャンパ
スの宿泊施設

3ヵ月程前ですが、レソトの人々の心優しき一面を感じる出来事がありました。私は職場から歩いて10分足らずの大学職員用住宅に住んでいます。風邪をひき土、日と寝込んでいましたが、月曜になっても治らないので寝ていました。私が働いている大学のITセクションの同僚に連絡しようとしたのですが、生憎携帯電話の電池が無くなり、しかも、携帯電話の充電器は職場に置いてきたままであり、連絡が取れないまま寝ていました。昼頃になり、起き上がり洗面所で顔を洗っていたら、家の外が騒がしいのに気がつきました。よく聞いてみるとしきりに私の名前を呼ぶ声が聞こえてきました。外に出てみると、ITセクションの同僚と大学の知り合いも含めて7,8名が来ていました。

「連絡が無く、大学にやって来ないので何か起きたのではないかと心配になってやってきた！」私の安否を案じて駆けつけてきた大学の知り合い達が話かけてきました。私は胸が熱くなり、彼らに心配をかけたことを詫びながらレソトの人々の心優しき一面を知りました。



大学のマセルキャンパスで職場の同僚と
バーベキューパーティ



大学の学生。明るくて屈託がない

2. 食事と買い物

昼食は大学内にあるカフェで食事をしています。カフェのメニューはチキンカレー、ポーク、オックスリバー、ローストチキン等で野菜とライス付きで値段は200~250円です。朝食と夕食は自分で作っています。外食をする事はほとんどありません。平日の夕食は土、

日に一週間分の食事を作って冷蔵庫に保存して、電子レンジで温めて食べています。10年余の海外での一人住まいの結果、料理作りは趣味になり苦ではありません。しかし、日本にいる時は自分で料理をする事は一切ありません。料理上手の妻がいるからです。



大学のカフェ

中央の女性はカフェの女将さん
この女将さんも明るくていつも元気に
「ヤマ」と私に呼びかけてくる



昼食はいつも大学のカフェで食べる

今日はビーフシチュウ

「パイオニアモール」と「マセルモール」、この二つのモールがよく買い物に行くお店です。「パイオニアモール」は町中にあり食糧品等はよくこの店で買います。食料品の種類は豊富で私がよく購入するのは野菜（ジャガイモ、ニンジン、玉ねぎ、キャベツ、南瓜、トマト）、果物、肉、食パン、牛乳、ヨーグルト、卵、ジュース等で1週間分3~4千円分程です。

「マセルモール」は若干郊外にある大規模なモールで多くの種類の店があり、日常生活品の購入はこのモールを使います。



パイオニアモール内にある食糧品店。

食料品の種類は豊富



郊外にある大規模なマセルモール

もう一軒、中心部から若干離れた場所に中国人経営の店があります。この店のお客は大部分が中国人で様々な中華食材を売っています。中国製醤油やタイ製の魚醤（ナンプラー）、日清食品のインスタントラーメン「出前一丁」、「北海道うどん」と銘打った常温で数か月保存出来るうどんは中国製であることを気にしなければ味やおいしさはまあまあ結構です。

「大根の漬物」も着色剤や甘味料を気にしなければ一応「大根の漬物」の味がします。エビ、貝、魚の冷凍品や米（短粒米）等を購入することが出来ます。大変重宝しているお店です。

3. 散髪は髪を切るとは限らない

20代の10年間、私は自分の髪は自分で散髪していました。従って、20代の半ば過ぎにケニアにいた2年間はアフリカの理容店に行った経験はありませんでした。ここ、レソトでは「パイオニアモール」の1階にある理容店で私は散髪をしています。その理由は、その店には直毛の髪を鋏で上手に散髪してくれるインド人職人が一人いるからです。理容料金は日本円換算で500円です。

日本での散髪代1,000円（私の場合）、バングラデシュ散髪代50円（地方での料金）、タイ散髪代300円（バンコク）はそれぞれの国の庶民の昼食代金の1.2~1.5倍ですので、レソトでの理容料金500円は若干高いかも知れません。

レソトでの理容料金が低いには理由があります。それは、「散髪は髪を切るとは限らない」



理容店の様子

からです。理容店に入った女性客はまず髪型を決めます。そしてエクステンション用髪を購入します。店員はエクステンション用髪をお客の地毛と編み合わせていきます。結構な時間をかけて地毛と編み合わせられたエクステンション用髪を決められた髪型に合わせて整髪していきます。お客の周りにはエクステンション用髪の残骸が散らばっていきます。この工程をみているとレソトでの理容料金が高くなるのも無理はありません。

しかし、男性客で短い髪を丸坊主にする場合はもっと安くしてもよいと考えますが、そうすると男性客と女性客の理容料金は5~6倍の差が発生してしまいます。男性客と女性客の理容料金のバランスをとるため男性の理容料金は若干高く設定されていると思われます。レソトでは日本も含め他のアジア諸国同様、いや、それ以上に女性パワーが強いのです。

4. 青いリンゴは御用達の店で

日本で食べるリンゴは美味しいが、青いリンゴはあまり食べたことはありませんでした。しかしレソトに来て青いリンゴをよく食べるようになりました。カリカリとした食感と甘酸っぱい味は食べつけると病みつきになりました。青い小さなリンゴを六等分してから皮をむき、変色を防ぐため塩水に暫く浸けて置き、タッパに入れておき食事のたびに食べています。

このリンゴを買う御用達の店があります。大学の入り口に近い道路の横にある店です。

買い物をするたびに小銭が溜まってきました。この小銭をどのように使うかを考えている時この店の前を通りかかり、それからこの店で青いリンゴを買うようになりました。最初買ったときは小銭でリンゴが買えて喜んで値段は余りにしなかったのですが、若干高く売りつけられていたようです。アジア人が買い物に来たので、一見の客だと思い若干高く売ったようです。しかし、何回も買って顔見知りになると適正価格で売ってくれるようになりました。こちらが間違っただけでお金を渡したときでもちゃんとお釣りを返してくれるようになりました。



店先に並んだ青いリンゴ
1個 20円



顔なじみになった店主、何時もマスクを被っ
ており素顔は見たことがない

5. 車の運転と交通マナー

買い物や町中に出掛ける時の足として、車を購入して乗っています。セキュリティアドバイザーや JICA から安全確保のため車を使うことを勧められています。費用は全額自己負担です。自分の安全は自分で守るためには仕方がないことと考えています。

日本で1年間有効の国際免許証を取得して車の中に置いていますが、今までにポリスから免許証の提示を求められたのは一度だけです。

レソトでの交通条件は日本と同じで、車は左側通行ですので違和感なく運転が出来ます。一般車両の運転マナーは意外に良いと感じます。しかし、タクシーと小型のバンに乘客を乗せるコンボタクシーには注意が必要です。彼らは乘客を確保するため、交通ルールは無視します。同僚に聞いたところでは運転免許は自動車学校に通ってちゃんと取得するそうです。

横断歩道やスピードを落とす必要がある場所は、道路が 25cm ほど盛り上がっています。標識があり、盛り上がっている部分は白線がひいてありますが、場所によっては白線が消えています。標識を見落とし、スピードを出したまま盛り上がっている部分に車が乗りあげると衝撃が来ます。注意が必要です。

町中を走っている車両の 60~75%は日本車両です。20%程度がドイツ車両です。日本車両は中古車でも品質が良いので評判が良いそうです。

6. スポーツクラブ

街中をブラブラと歩く事は安全上避けており、移動は車ですするため運動不足となりがちです。それと、行き先が限られているため休日等は時間を持て余してしまいます。タイやスリランカにいた時、休日はゴルフやスキューバーダイビングをやっていました。レソトにもゴルフ場はありますがボランティアの身分とゴルフは今さらという気分でやる気にはなれません。現在ではレソトに日本人は私一人であり一緒に回る相手もいません。スキューバーダイビングはレソトに海がないため出来ません。

運動不足解消と時間の有効利用のため、2つのスポーツクラブに所属して運動をしています。1つ目のスポーツクラブは大学の教職員で作っているスポーツサークルです。平日はこのサークルに参加しています。十数名がメンバーになっており、大学内の設備を使ってエクササイズをやったり、大学から 2~3km 離れた郊外にある「マセルモール」等へウォーキン

グをしています。このサークルに参加したおかげで大学内の様々な人々と知り合う事が出来るメリットがありました。

2つ目のスポーツクラブは「Lehakoe:レハコエ」スポーツクラブです。会員制クラブで3ヵ月間の料金は1万2千円程です。平日は朝5時から夜9時まで開館してあります。私はもっぱら土、日の午前中に運動しています。館外にはテニス、バレー、バスケット等のコートがあります。館内には25mのスイミングプールやスカッシュが出来るコートが2ヵ所とさまざまな運動器具が百数十台揃っています。

運動の後はサウナやミストサウナに入りシャワーを浴びることが出来ます。

7. レソト写真館



学園祭で仮装した貫禄十分の三人組
彼女たちもれっきとした大学の女子学生



パーティで見かけたスリムな少女3人組。何年か経つと左の女性たちのようになってしまうのか？

職場のタベルさんに「パーティがあるからおいで！」と言われてノコノコと一人で出かけた先には多くの現地の人々が集まっており、食事が振舞われた。最後まで何のパーティなのかは解らなかったが楽しんでしまった。

現地便り (コロンビア便り 5)

サッカーワールドカップ日本の評判

ICT海外ボランティア会幹事 SV 野村 徹

去年の10月12日、ワールドカップ出場権を賭けたコロンビア対チリの試合が始まると私の派遣先である映像コースの先生や生徒はテレビの前に集まり、授業どころではないという感じでした。

チリと引き分けた事により出場権を得た瞬間、私の部屋(13階)に歓声が聞こえ、それと同時にクラクションが鳴り出し街は夜中まで賑わっていました。

その後、試合の組み合わせがきまり日本とコロンビアが同じグループになると私の同僚が私のところに来て、その旨を伝えにきました。

激戦区を勝ち上がり4大会ぶりに出場を決めた喜びに浸っているコロンビアは、私の見る所、日本と戦う事にあまり関心を持っていません。



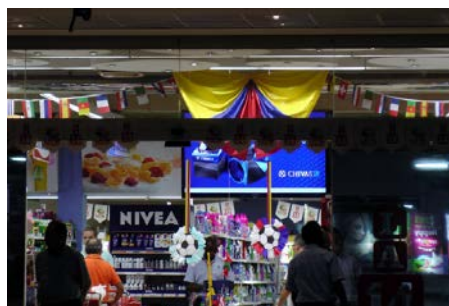
もっと端的に言うと彼等は日本に負けるはずはないと思っているようです。しかし、そこは相手もたて、日本と引き分けてお互いに勝ち抜いていこうという人達もいます。

ワールドカップの出場が決まるとスポーツ具店はもとより街の角々でコロンビアチームのユニホームが売られそれを着て歩く人達が増えてきました。



これからますます増え、勝ち進んでいくと街はユニホーム姿であふれ学校も授業どころではなく先生も生徒もテレビの前に釘づけになっている事でしょう。

熱狂する市民のスナップを添付します。



第8回 海外情報談話会開催模様

事務局

標記談話会は、去る5月30日に開催され、22名の参加がありました。演題は「インドネシア・タイにおける最新のモバイルコミュニケーション」で講師は情報通信総合研究所副主任研究員佐藤 仁氏です。講師の実体験と緻密なデータを駆使した講演は素晴らしく参加者を魅了しました。講師に纏めていただいた講演概要は次の通りです。(事務局)

インドネシア、タイでは新たなコミュニケーションのツールとして、「メッセージアプリ」+「スマートフォン」+「Wi-Fi」が中心になってきている。その背景と特徴を見ていきたい。

■氾濫するプリペイドSIMカード

インドネシア、タイではコミュニケーションの主流は携帯電話である。日本のようなポストペイド方式ではなく、プリペイド方式でSIMカードを購入するのが主流。使いたい時にSIMカードを購入し、残高が無くなったら必要に応じてチャージをしている。そのため、1

人で複数枚の SIM カードを持っている人が多いので、携帯電話の人口普及率は 100%を超えている。平均年齢 28 歳のインドネシアでは携帯電話の加入者数が 2 億 8,000 万人を超え、人口普及率が約 120%、タイでは携帯電話加入者数が 8,700 万を超え、人口普及率が約 135%である。携帯電話会社も常に新しいキャンペーンを行っており、町の至る場所で SIM カードを販売している。「キャンペーン対象の SIM カード」を購入して通信費用を少しでも安く済ませることが多い。そしてキャンペーン期間が終了してしまったら、その SIM カードは使われなくなることも多い。



バンコク、ジャカルタでの
SIM 販売

■電話番号はもう要らない？

SIM カードを頻繁に買い替えている人が多いということは、その都度電話番号が変わっている。電話番号が変わると相手に SMS を送付しても、相手はその番号をもう利用していないということになる。1人で複数枚 SIM を利用している場合、その SIM の電話番号にメッセージを送付しても携帯電話に挿入してない、ということも多くある。新しい SIM カードにした時に仲が良い友人にはすぐに通知するだろうが、頻繁に SIM カードを買い替えていくうちに、通知するのも面倒になってくることもある。もはや電話番号に基づいたメッセージのやり取りが面倒になってしまい、人間関係にひびが入ってしまうこともある。

■台頭するメッセージングアプリ

そこで SIM カード（電話番号）を変えても自分であることが認識されるメッセージングアプリの方が使い勝手が良くなる。メッセージングアプリとは日本では「LINE」が有名で一番よく利用されている。タイでは「LINE」や「WhatsApp」、インドネシアでは「WhatsApp」、「WeChat」「LINE」などが人気である。SIM カードが変わって電話番号が変わったとしても、相手に新しい電話番号を通知して自分であることを認識してもらう必要はないから利便性が高い。このようにして電話番号だけの SMS のやり取りは遠くなってしまふ。つまり、携帯電話会社がキャンペーンをやればやるほど（SIM が売れば売れるほど）、電話番号は「おまけ」になってしまい、SMS の利用は遠くなっていくのではないだろうか。



ジャカルタでのメッセージアプリの広告



LINE のキャラクターはタイで人気があり、
若者の生活の中に溶け込んでいる。

チュラロンコーン大学の卒業パーティ案内

■普及するスマートフォンと Wi-Fi

最近ではスマートフォンが普及してきており、ジャカルタ、バンコクの大都市では若者を中心にほとんどがスマートフォンを利用している。また携帯電話端末は中古市場が主流である両国において、最近では中古のスマートフォンも大量に出回るようになった。初期の iPhone や Android OS 端末が中古品として多く見かけるようになりました。また中古でなくとも地場メーカーや中国メーカーのスマートフォンが安価で入手できる。また、モバイルからインターネットへのアクセスは 3G より Wi-Fi が主流である。コンビニやカフェ、大学などでは無料（または安価）で Wi-Fi が利用できるため、そこでスマートフォンからインターネットへアクセスしている。



Wi-Fi にアクセスするためにコンビニ
に集まるジャカルタの若者

第9回海外情報談話会開催のお知らせ

ICT 海外ボランティア会
共催 情報通信国際交流会

第9回海外情報談話会を以下により開催いたします。参加をお待ちいたしております。

日 時：平成26年7月18日（金） 午後3時～5時

場 所：JTEC（海外通信・放送コンサルティング協力）
（東京都品川区西五反田8-1-14 最勝ビル7階 03-3495-5211）
JR五反田駅より徒歩5分
（JTECは昨年2月に転居しました。道順はJTECのホームページをご覧ください）
今回の場所は、情報通信エンジニアリング協会ではありません。

話 題：ネパールで草の根ボランティアの20年 –OKバジと呼ばれて–（仮題）

講演者：OKバジさん（垣見 雅一氏）

宇野 真人氏（認定NPO法人いきいきフォーラム草の根支援理事長）

講演内容：

垣見さんは早稲田大学を卒業し、順心女子学園で英語教師を務めていました。ヒマラヤ登山中雪崩に遭い、ご自分のポーターが亡くなってしまいました。彼の村を訪れると厳しい条件の中で暮らす人々の姿が見え、1993年に退職し、その地、東パルパで草の根ボランティアとして1人で活動を始め現在に至っています。今でも事務所を持たず、集めたお金を100%村人に届けたいのです。村に学校を建て、水場を整備し、病気の人に治療費を出し、米の買えない貧しい人にプレゼントします。最初ご自分はテント住まいだったそうです。見かねた村人が狭い小屋を作ってくれましたが、今では月にわずか泊まるだけで、より遠方の山間部を歩き、支援の手を差し伸べています。このボランティアの様子を直接伺います。

バジさんのネパール在住10周年の感謝の会には歩くしか移動手段のない山間部の人たちが、野宿をしながら1万5千人も集まったとのこと。2009年には吉川英治文化賞を受賞されました。今年3月には20周年のお祝い会がありました。

バジさんの活動を支援するNPO法人の宇野理事長からは、支援活動の様子を紹介していただきます。

参 加： 入場料無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 kato2415@jasmine.ocn.ne.jp までご一報下さい。

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp),または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

- ・ 「技術協力の思い出」の5回目を、松本道夫さんにご寄稿いただきました。35年前電電公社時代のJICA 専門家として、電話網計画策定の技術協力の様子は貴重な記録としての価値もあります。
- ・ 海外情報談話会も軌道に乗ってきました。第8回の佐藤さんの講演も参加者を魅了しました。第9回はネパールで20年間も貧困の村興しに文字通り献身され、村民から絶大な尊敬を得ている垣見雅一さんのお話は、きっと皆様に感動を呼び起こすものと思います。皆様のご来駕をお待ちいたします。 (以上 加藤)
- ・ 石井孝さんの「真藤語録」今回は現在、日本が直面している、経験してきた直近の例を取り上げているように感じました。勝って兜の緒を締めるのは大事ですが、苦境の際の行動の重要性を説かれた気がします。
- ・ 加藤さんの「会報 50 回目の感想」編集担当として身にしみて受け止めました。関係する皆様のご意見を座右の銘として、精進して行こうと思います、皆様のご意見を今後ともお願いします。
- ・ 田上さんから（ドイツの香り）寄稿していただきました。ベートーベンの第九は年末行事と心得ていた残学私事、徳島の6月の第九（合唱付き）を知りました。
- ・ 現地便り、山下さんの「レソト便り (2)」を掲載しました。野村さんの「コロンビア便り (5)」は、サッカーブラジル大会予選同組となった、コロンビアの様子を掲載しました。サッカーは世界どこでも人気スポーツなのにいまさら、改めておどろきました。

(以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 村上勝臣

発行：ICT 海外ボランティア会 (メール：sv@info.nttob.org/)